

ハンガリーのペーチ大学との共同研究・ワークショップの開催

「東中欧・バルカン地域におけるインターカルチュラル圏の形成と変容」

名古屋市立大学大学院人間文化研究所 (やまもと・あきよ) 山本明代

二〇一〇年度から始まった日本学術振興会の二国間交流事業・ハンガリーとの共同研究「東中欧・バルカン地域における職能集団をめぐるインターカルチュラル圏の形成と変容」の第二回目のワークショップを二〇一一年一月五日と六日に開催した。昨年はハンガリーのペーチ大学でコンフェレンスとワークショップを行い、その内容と成果については『人間文化研究所年報』第六号(二〇一一年三月)で報告している。

今年度のワークショップを行うため、ペーチ大学の研究者が一月一日から二週間、名古屋を中心として滞在中。ペーチ大学は人間文化研究所と学長の訪問を行った。人間文化研究所では、阪井芳貴研究所長と二〇〇八年にシンポジウム「観光まちづくりの国際比較」を共に開催した山田明先生と今回の訪問の目的等について懇談した。その後、戸蒔創学長を訪問

し、今川正良副学長、人間文化研究所の藤田榮史研究科長の同席のもと、共同研究の内容やペーチ大学の紹介を行った。

今回の来日の第一の目的はワークショップを開催することだったが、それ以外にも日本各地を訪問し、本共同研究のテーマともかかわる日本各地の産業と文化の歴史、職人・職能集団の技術、文化遺産の保存について見識を深め、今後の共同研究の進展につなげることも目的だった。名古屋では、トヨタ産業技術記念館、名古屋城、徳川園・徳川博物館を見学した。名古屋以外では、東京、大阪、京都、奈良、広島、長崎、熊本、福岡の各地を訪問した。東京ではハンガリー大使館とハンガリー文化センターの訪問、明治大学図書館での古地図の見学、大阪大学ではペーチやバルカンに関するセミナーの開催、長崎県立大学ではハンガリー政治の現状に関するセミナー開催も行った。

今回の来日の第一の目的はワークショップを開催することだったが、それ以外にも日本各地を訪問し、本共同研究のテーマともかかわる日本各地の産業と文化の歴史、職人・職能集団の技術、文化遺産の保存について見識を深め、今後の共同研究の進展につなげることも目的だった。名古屋では、トヨタ産業技術記念館、名古屋城、徳川園・徳川博物館を見学した。名古屋以外では、東京、大阪、京都、奈良、広島、長崎、熊本、福岡の各地を訪問した。東京ではハンガリー大使館とハンガリー文化センターの訪問、明治大学図書館での古地図の見学、大阪大学ではペーチやバルカンに関するセミナーの開催、長崎県立大学ではハンガリー政治の現状に関するセミナー開催も行った。

ワークショップでは、昨年

ワークショップの内容を踏まえて、その後進展した研究の成果を報告した。報告が専門的な内容になるため、今回のワークショップは共同研究メンバーと日本のバルカン地域研究専門家を中心に行うことになった。前述したように、ワークショップは五日と六日の二日間にわたり、滝子キャンパス一号棟一階会議室で行われた。

開会の挨拶と参加メンバーの紹介に続き、各報告が始まった。第一報告は、百瀬亮司氏(大阪大学)による「一九八〇年代のコンヴォをめぐる歴史学」であった。本報告では一九八〇年代ユーゴスラヴィアにおいて、歴史学者がどのような議論を積み上げて、アイデンティティをめぐる諸問題に関わっていたのかを考察した。そして、コンヴォにおけるセルビア人の歴史的権利を主張したボグダノヴィチの主張がコンヴォにおけるセルビア人の受難を強調するセルビア正教会のイデオロギーと共鳴することによって、ボグダノヴィチが「学問的権威」、民族主義政治の一翼を担ったことを明らかにした。

いて第一次世界大戦に伴う政治地理的变化がエトノス分布にもたらした影響を検討するものだった。多様性指数に基づく公式を用いて国勢調査を分析した結果、人口移動の主要アクターであったセルビア人は、自集団がマジヨリテイの市町村よりもハンガリー人やドイツ人マジヨリテイの市町村に移入し、多様度を上昇させたことが明らかになった。以上で、第一日目の報告は終了した。

ク・中欧一六八三—一八六七年(二〇〇六年)から、中欧における国境形成の要因と特徴を分析した。この地域の歴史的国境は重層的な境界によって形成されており、不安定な要素を内包していることを明らかにし、国境の形成過程とその特徴をめぐる国際比較研究の可能性を指摘した。

第二日目にも引き続き、各報告を行った。第五報告は、木村真人(日本女子大学)「ブルガリア人野菜栽培農民の移動」であった。この報告は、一七世紀にイスタンブールで野菜栽培の技術を学んだバルカン山麓のキリスト教徒が一九世紀にハンガリーに到着した過程とその実態を考察するものだった。一九世紀後半から二〇世紀前半にハンガリーへのブルガリア人野菜栽培農民の出稼ぎや移住が増加したのは、ハンガリーで都市向けの野菜栽培が拡大した時期に合致していたことを指摘した。

第七報告は、シヨクチェヴィチ・デーネシュ氏「ハンガリー世論における軍政国境地帯のイメージと一九世紀のクロアチア人・セルビア人国境民世界におけるハンガリー人へのステレオタイプ」であった。ハプスブルク帝国政府がオスマン帝国との戦争終結後にクロアチアとスラヴォニアに軍政国境地帯を形成したが、その国境民とハンガリー人との間では、一八四八年革命の経緯により相互に負のイメージが形成されたことを明らかにした。

第六報告の戸谷浩氏(明治学院大学)「国境と近代 (Frontiers and Modern Times)」は、R.J.W.エヴァンスの著書『オーストリア、ハンガリー、ハプスブル

第八報告は、キタニチ・マーティ氏「ハンガリーの『ギリシア』商人—一八世紀後半および一九世紀初頭のモハーチを中心に—」であった。まず、「ギリシア」商人と呼ばれる人々の定義を、ギリシア正教徒であり、生業として商業を営む店舗持ち商人、あるいは遠隔地商人とするとした。そして、

バラニャ県モハーチで活躍したポヴォイチ・デイモ一家の事例を基に、「ギリシア」商人の実態の解明に迫った。

第九報告の秋山晋吾氏(一橋大学)「ペシュトのギリシア商人(一八世紀末—一九世紀初頭)」は、一八世紀にハンガリーで活躍したギリシア商人を北方交易型、地域商業型、東西交易型の三つに類型化できることを指摘した。そして、一八世紀末から一九世紀初頭のペシュトのギリシア商人に関わる文書史料に基づき、商人間の関係や商人の家族関係、エトノス意識の形成について考察した。

第一〇報告は、鈴木広和氏(大阪大学)「一六世紀前半のハンガリー知識人の『トルコ人』像」だった。実際にオスマン帝国を訪れた知識人たちが、「トルコ人」をどのように認識し描いたのかを考察した。オスマン帝国で捕虜・奴隷として暮らした者の著述とキリスト教側の外交使節・使節に同行した実業家が描いた旅行詩・報告書を対比し、その相違について分析した。その結果、ステレオタイプの「トルコ人」とキリスト教徒としての否定的イスラーム教徒観を抽出することができたが、その「トルコ人」像は一様でなかつ

たことを明らかにした。

このワークショップは、一部を科学研究費補助金・基盤研究(C)「チエコスロヴァキアとハンガリー間の住民交換にみる国民的地域的再編と記憶の継承」(代表・山本明代)と共催で行い、山崎信一氏(東京大学)と鈴木健太氏(東京大学)からバルカン地域研究の視点からコメントをいただいた。このペーチ大学との共同研究は今年度で一旦終了するが、今後二年間の研究成果をまとめ、ハンガリーと日本で論文集として刊行する計画である。